母豚の品種、産歴および分娩季節が豚分娩の一腹産子数および発育に及ぼす影響

○谷原礼諭・豊嶋愛・上原力（香川県畜産試験場）

【目的】養豚農家が生産性の高い種豚を効率よく生産していくために、母豚の品種、産歴および分娩季節が分娩成績並びに発育に与える影響を明らかにする。【方法】香川県畜産試験場では、母豚（ランドレース種（以下「L」）、大ヨークシャー種（以下「W」）、バークシャー種（以下「B」）、デュロック種（以下「D」）およびこれらの交雑種）を交配し、分娩予定１週間前までに高床式分娩ストールに移動し分娩させている。本研究では、令和２年度から令和４年度の分娩 131 腹およびその出生子豚 1,261 頭の一腹産子数、出生時一腹総体重および３週齢時一腹総体重を用い、これらの形質に与える影響について、母豚の品種、分娩季節および産歴を要因とした分散分析（有意差水準は $p<0.05$）を実施した。統計解析はＥＺＲ（Bone Marrow Transplantation（2013）p452）を用いた。【結果】母豚の品種による有意な影響が認められたのは一腹産子数、出生時一腹総体重および３週齢時一腹総体重であり、一腹産子数についてはＬ（11.3 頭）とＤ（8.44 頭）およびＬとＢ（8.24 頭）、出生時一腹総体重についてはＬ（14.48 kg）とＤ（10.97 kg）およびＬとＷ（9.69 kg）、３週齢時一腹総体重についてはＬ（58.65 kg）とＢ（44.32 kg）、ＬとＤ（36.77 kg）、ＬとＷ（36.65 kg）、ＢとＤおよびＢとＷでそれぞれ有意差が認められた。分娩季節による有意な影響が認められたのは３週齢時一腹総体重であり、５～６月期（60.68 kg）と９～10 月期（43.29kg）の間で有意差があった。また、いずれの形質においても産歴による有意な影響は認められなかった。

令和 5 年度第 73 回関西畜産学会大会（愛媛大会）